

記憶のケア・脱中心化・脱集計化

ある倫理学研究者のスローな足どり

川 本 隆 史

研究室紀要 第42号 別刷

東京大学大学院教育学研究科 基礎教育学研究室

2016年7月

記憶のケア・脱中心化・脱集計化

——ある倫理学研究者のスローな足どり——

川 本 隆 史

はじめに——テーマの再定位

「最終講義」といった仰々しい舞台からではなく、ラウンド・テーブル（院生・スタッフが一堂に会する「総合演習」という席）での話題提供という形式張らない語りのにせて、退職に当たってのメッセージをお届けしようと思います。11年間の在職中、ここを去られたスタッフすべてがそうした「美風」を守り続けてくださいました。私もそれに従うことといたしましょう。

当初の構想メモ（2015年3月12日作成）には「被爆都市・cura personalis・高校暴動——教育のマイクロヒストリアのために」という洒落た(?) タイトルが冠されています。故郷の広島で受けた初等・中等教育（1958～1970年）の「自分史」を回顧・総括しようと目論んでみたのです。私が通った広島市立己斐（こい）小学校は、1945年8月6日の原爆投下直後から臨時の救護所となり、その校庭で2,300余名の被爆死者の方がたを何日もかけて火葬するにいたりました（「8月9日／己斐国民学校（己斐小学校）」、那須正幹＝文／西村繁男＝絵『絵で読む広島原爆』、福音館、1995年、42-43ページに凄惨な光景が描かれています）。また私の母校は、戦後初期に始動したコア・カリキュラム運動の拠点校のひとつに数えられており、「第三回新教育研究大会」（1949年11月11日～12日）の会場となったのに合わせて、「地域社会に即した平和教育」を志向する同校のカリキュラム改造の要綱を冊子『己斐プランの展開』（B4判ガリ版刷46枚）のかたちで発行していたのです。

東京オリンピック開催を控えた1964年4月、私立の中高一貫男子校・広島学院に入学します。cura personalis（「一人ひとりに心を配る」）とは、同校の設立母体であるイエズス会（1534年創設のカトリック男子修道会）の教育姿勢を端的に表すもので、その核心はこう解説されています——「一人ひとりの

生徒の知的、情緒的、倫理的、霊的成長に関心を持ち、一人ひとりが自分の価値に目覚め、共同体の中で責任をもてる人となるよう励まします。生徒のプライバシーを尊重しながら、人生の意味に対する生徒の心配や悩みに耳を傾けます。生徒と喜びや悲しみをもとにし、個人としての成長や、他人との人間関係について示唆を与えます」（イエズス会教育使徒職国際委員会編『仕えるために～イエズス会教育の特徴～』梶山義夫監訳、ドン・ボスコ社、2005年、24ページ）。

中等教育の最高学年に達した多感な少年が、1969年の日本列島各地に同時多発した「高校暴動」に遭遇します。「高校紛争」ではあまりに当事者性が希薄だし、「高校闘争」と言い張れるほどの積極的関与（コミットメント）を率先して示したわけではありません。そこで四方田犬彦さんの『ハイスクール1968』（新潮社、2004年／新潮文庫、2008年）にあった示唆を借りて、自らを「高校暴動」世代だと自己定義するようになりました。69年の広島での熱い体験は、今なお私の学びと教えの「原点」であり続けています。そのあたりの消息も含めて、「生きられた戦後教育史」もどきを披瀝しようといったん心に決めたのですけど、あれこれ勘案した挙句このプランを取り下げました。児童・生徒だった1950～1960年代からぐっと時計の針を進めて、高等教育の専任教員（かつ社会倫理学の中堅研究者）におさまっていた1990年代半ば以降の20年におよぶろい歩みを三題噺ふうにたどっていく路線へと切り替えさせてもらいます。

問題意識の端緒と展開——「記憶のケア」から「脱集計化」へ

発端は1995年1月17日の阪神淡路大震災にさかのぼります。この災害と同年3月20日の地下鉄サリン事件とを契機として、日本のマスメディアに「心の

ケア」という用語が登場し、瞬間に普及していきましました。私自身は心理学者キャロル・ギリガンが「正義の原理」への対抗軸として打ち出した「ケアの倫理」(『もうひとつの声』原著1982年)に理論上の興味を抱いていたこともあって、この95年の出来事を通じてケアへの実践的な関心をかきたてられます。ちょうどそのころNHK教育テレビで始まった教養シリーズ「未来潮流」への出演を持ちかけられたので、三つの現場(神戸・広島・東京)を巡り歩いて「いのちのケア」の意義と課題を探るという趣旨のもと「心のケア／記憶のケア／制度のケア」を三本柱とする番組のメインキャスターをあい務めました(96年7月3日75分間のオンエア、この回の副題は「倫理学者・川本隆史のいのちのケアを洞察する」)。

『記憶』のパートでは、広島平和記念資料館を訪ねたあと「全国原爆被爆二世教職員の会」会長の中谷悦子さん(当時、広島県大竹市立小方小学校勤務)と対談しています。そこで持ち出した「記憶のケア(世話・手入れ)」というのは、被爆の記憶の手入れを通じて、固定観念や神話へと凝固しがちな「記憶」をほぐしつつ、そこに見出された歪み・欠落を一つひとつ丹念に改めようとする営みのことです。中谷さんと確認した欠陥のひとつは、「唯一の被爆国である日本」という括り方——一部の論者は、そのような発想が「被爆ナショナリズム」を誘発するのだと指摘しています——が「在外被爆者」を救済の対象から除外したり、アジアへの加害責任を棚上げにするなどの偏りをもたらすことでした。こうした不備を見直すのが「記憶のケア」なのではないか、と。

「脱集計化」ということばを教わったのは、峯陽一さんの論説「開発研究にセンがもたらしたもの」(『経済セミナー』1999年3月号、日本評論社)からです。『経セミ』の同号は、1998年度のノーベル経済学賞を受賞したアマルティア・センを特集しており、拙論「経済学の良心あるいは良心の経済学——アマルティア・センの思想と行動」も併載されています。「脱集計化」の中身に関しては、後のお楽しみということで……。

こうしてお膳立てが整ったところで、「記憶のケア」と「脱集計化」の探究がスタートしました。手始めは、2004年の7月31日、広島平和研究所主催の国際シンポジウム「エノラ・ゲイの閃光——戦争と破壊の象徴：1945～2004」(広島国際会議場)におけ

る発題「記憶のケアと記憶の共有——エノラ・ゲイ展示論争をめぐって」です。このシンポは、アメリカのスミソニアン博物館においてエノラ・ゲイ号(広島に原爆を投下したB29戦略爆撃機)の永久展示が始まったのを受けての企画でありまして、後日その報告書が刊行されています(同研究所のホームページからダウンロード可能)。なお『思想』2004年11月号巻頭の小文「記憶のケアから記憶の共有へ——エノラ・ゲイ展示論争の教訓」は、当日のプレゼンテーションを敷衍したものです。

「脱集計化」を「自家薬籠中の物とする、試み(appropriation=我有化)には、『岩波講座哲学第1巻：いま〈哲学する〉ことへ』(岩波書店、2008年)所収の試論「不条理な苦痛、と「水俣の傷み」——市井三郎と最首悟の〈衝突〉・覚え書」から取りかかりました。「不条理な苦痛、は減らさねばならない」とする社会倫理学の原理をせつかく案出なさった哲学者の市井三郎さんでしたのに、胎児性水俣病の患者さんたちを目の当たりにしたときのショックから、一足飛びに公害の文明論的考察へと乗り移ってしまい、「人間淘汰」なる理不尽な注釈を捻り出さざるを得なくなった。そうした市井さんの「失敗」は、「不条理な苦痛、という集計概念を個々のケース(=苦しみが発生した《現場》)に即してばらしてみるといふ「脱集計化」が不徹底だったゆえに生じたのではないか——こう分析してみたのです。

2008年6月22日、小著『共生から』(双書・哲学塾、岩波書店、2008年)の合評会を郷里の友人たちが開いてくれました(会場はひろしま女性学研究所)。著者自身の事後レポートを準備する過程で、ヒロシマの体験と表現をめぐる二人の詩人(石原吉郎と栗原貞子)の間の確執を知らされました。これは本日のお話しの基軸をなすものですから、別項を立てて検討するつもりです。ついで翌2009年、日本哲学会のシンポジウム《格差・平等・国家》(5月16日、慶應義塾大学三田キャンパス)での発題論文「格差原理・デモクラティックな平等・租税による支え合い——溜め、のある社会をめざして」(日本哲学会編『哲學』第60号、知泉書館)の冒頭で、「脱集計化」の意義を表明しておきました。

2011年3月11日の東日本大震災および福島第一原発の事故が、正義とケアを兼ね備えた社会のあり方を構想していた私に複数の難問を突きつけます。いろいろと模索を続けた新年度の大学院ゼミに、日本

基督教団大船渡教会の村谷正人（むらや・まさひと）牧師をお招きすることができました（6月20日の3限——ボランティアとして当地で働いた村上美奈子さんの仲介によるものです）。村谷さんが打ち明けてくださった「瓦礫」という括られ方に対する被災当事者の違和感や「頑張れ」でなく「顔晴る」という文字に励まされたというエピソードに深く感じ入った私でした。

2010年の春、突如として「サンデル・ブーム」が巻き起こりました（「ハーバード白熱教室」のテレビ放送および訳書『これからの「正義」の話をしよう』の大ブレイク!）。これにあやかるとして、NHK教育テレビが「白熱教室JAPAN」を仕かけます。たまたまロールズの『正義論』の新訳を上梓したばかりだった私にも、番組出演のオファーが届けられました。ロールズとヒロシマとの関わりに触れながら、現地・広島での公開収録という条件提示だったのです。ところが担当者と相談を重ねている最中に震災・原発事故が勃発したため、急遽コンセプトを練り直さざるを得なくなりました。広島大学文学部の教室での公開収録は2011年の6月26日、これを60分枠の番組二本に編集して放送されたのが7月24日と31日、通しのタイトルは「ヒロシマからフクシマへ届けられるもの」と変わっています。その二回目で取り上げたのが、石原吉郎と栗原貞子のやり取りであり、これを読み解くキーワードとして「脱集計化」と「脱中心化」を提案したのでした。

ヒロシマをめぐる二人の詩人の応酬——被害の脱集計化と現場の脱中心化

（1）石原吉郎の「断念」：ジェノサイドと「広島告発」への批判（1972年）

ここから今日の本題に入ります。石原吉郎（1915年～1977年）のプロフィールおよびシベリアでの強制収容所体験に基づく鮮烈な《共生》論（あの1969年に公表された掌編「ある〈共生〉の経験から」）に関しては、拙著『共生から』（前出）に譲り、三つの文章を時系列順に引用するにとどめます。

まずは一つ目、一連の「シベリア・エッセイ」のトップを切った作品から。

「ジェノサイド（大量殺戮）という言葉は、私にはついに理解できない言葉である。ただ、この言葉の

おそろしさだけは実感できる。ジェノサイドのおそろしさは、一時に大量の人間が殺戮されることにあるのではない。そのなかに、ひとりひとりの死がないということが、私にはおそろしいのだ。人間が被害においてついに自立できず、ただ集団であるにすぎないときは、その死においても自立することなく、集団のままであるだろう。死においてただ数であるとき、それは絶望そのものである。人は死において、ひとりひとりその名で呼ばなければならないものなのだ。[……]私は広島について、どのような発言をする意志ももたないが、それは、私が広島を目撃者ではないというただ一つの理由からである。しかしそのうえで、あえていわせてもらえるなら、峠三吉の悲惨は、最後まで峠三吉ただ一人の悲惨である。この悲惨を、不特定の、死者の集団の悲惨に置き代えること、さらに未来の死者の悲惨までもそれによって先取りしようとするのは、生き残ったものの不遜である。」

（「確認されない死のなかで——強制収容所における一人の死」、『現代詩手帖』1969年2月号、思潮社〔後に石原の『望郷と海』、筑摩書房、1972年に再録——この本は岡真理さんの解説を付して、みすず書房から2012年に復刊されました。〕）

二番目は「自作を語る」という連続講座（1969年4月～6月、全13回）の記録からです。

「「告発しない」という姿勢について [……] 人間が告発する場合には、政治の場でしか告発できないと考えるから、告発を拒否するわけです。それとも一つ、集団を信じないという立場があります。集団にはつねに告発があるが、単独な人間には告発はありえないと私は考えます。[……] 私は、戦争を通して来た世代の一人として、自分が目撃したものを証言する義務のようなものを今も負っていますし、およそ自分の目撃しないものについては、沈黙しなければならないとかたく考えています。[……] 告発することを自らに禁じた者が、なおその位置で立ちつづけようとするとき、はじめてその〈告発〉に真剣な表現と内容が与えられるのだと私は考えます。」

（「沈黙するための言葉」、日本現代詩人会編『現代詩作詩講座1 詩をどう書くか』、現代教養文庫、社会思想社、1970年所収〔上掲『望郷と海』に再録〕）

1969年4月20日「水俣病を告発する会」が熊本で旗揚げし、その後全国各地へと広がっていきます。

「告発」という法廷用語が多彩な社会運動を結集する機軸へと横滑りしていくようなムードに対して、石原はある種の違和感を覚えていたのではないのでしょうか。

上に引用した二篇を布石にして書かれた「アイヒマンの告発」を、長めに抜き書きしておきます。そこには「計量的発想」および「広島告発」という運動の進め方に対する深刻な疑念が呈されておりました。

「あるエッセイで、「広島について、どのような発言をする意志もたない」とのべたことにたいして、その理由をたずねられた。手みじかにいえば、私が広島を目撃者でないというのが、その第一の理由である。人間は情報によって告発すべきでない。その現場に、はだして立った者にしか告発は許されないというのが、私の考え方である。／第二の理由は、広島告発、すなわちジェノサイド（大量殺戮）という事実の受けとめ方に大きな不安があるということである。私は、広島告発の背後に、「一人や二人が死んだのではない。それも一瞬のうちに」という発想があることに、つよい反撥と危惧をもつ。一人や二人ならいいのか。時間をかけて死んだ者はかまわないというのか。戦争が私たちをすこしでも真実へ近づけたのは、このような計量的発想から私たちがかりうじて抜け出したことにおいてではなかったのか。／「一人や二人」のその一人こそが広島の原因である。年のひとめぐりを待ちかねて、燈籠を水へ流す人たちは、それぞれに一人の魂の行くえを見とどけようと願う人びとではないのか。広島告発はもはや、このような人たちの、このような姿とははつきり無縁である。／「百人の死は悲劇だが、百万人の死は統計だ。」これはイスラエルで、アイヒマンが語ったといわれることばだが、ジェノサイドはただ量の恐怖としてしか告発できない人々への、痛烈にして正確な解答だと私は考える。／広島告発について私が考えるもうひとつの疑念は、告発する側はついに死者ではないという事実である。被爆者不在といわれてすでに久しいが、被爆者以前にすでに、死者が不在となっている事実をどうするのか。死者に代って告発するのだというかもしれない。だが、「死者に代る」という不遜をだれがゆるしたのか。死者に生者がなり代るといふ発想は、死者をとむらう途すら心得ぬ最大の顔廢である。[……]／広島を「数

において」告発する人びとが、広島に原爆を投下した人とまさに同罪であると断定することに、私はなんの躊躇もない。一人の死を置きざりにしたこと。いまなお、置きざりにしつづけていること。大量殺戮のなかのひとりの重さを抹殺してきたこと。これが、戦後へ生きのびた私たちの最大の罪である。量のなかの死ということへの私たちの認識は、とおくアイヒマンのそれにおよばぬことを、痛恨をこめて思い知るべきだと私は考える。」

(「アイヒマンの告発」、『ユリイカ』1972年11月号、青土社〔同『海を流れる河』花神社、1974年に再録——本書は他の二冊の評論集と合わせて再編集の上、『石原吉郎評論集 海を流れる河』と題して同時代社より2000年にリリースされています。)]

広島の平和教育や原水爆禁止のキャンペーンのなかで「一瞬のうちに、何万人もの尊いいのちを奪った原爆」というフレーズが「決まり文句」のように多用されてきました。そういった風潮に抗して、「広島を「数において」告発する人びとが、広島に原爆を投下した人とまさに同罪であると断定することに、私はなんの躊躇もない」と石原は言い放っていたのです。なお管見の限り、その当時「広島告発」をストレートに掲げていた運動や論者は見当たりません。石原独自の集約表現なののでしょうか。やや関連がありそうな単行本としては、「ヒロシマの告発」を副題とする金井利博さんの『核権力』（三省堂、1970年）が目についたくらいです。

（2）栗原貞子の呼びかけ：「知って下さい、ヒロシマを」（1983年）

こうした「広島告発」批判に対して応答しようとしたのが、広島生まれの被爆詩人・栗原貞子さん（1913年～2005年）でした。戦後の彼女は反戦・反核・反差別・反天皇制の旗幟を鮮明にしなが、精力的な活動を繰り広げていました。代表的な作品のひとつに「生まれめんなな」という詩があります（初出『中国文化』創刊号、1946年3月）。その栗原さんが書いた石原への返歌ともいふべき「知って下さい、ヒロシマを」——この作品の存在を私が知ったのは、前述したとおり2008年6月のことです。10連からなるこの詩の第1連と第9連だけを朗読させてもらいましょう。

「一人の死を無視するが故に／数を告発するヒロ

シマを／にくむ という 詩人Yよ／ヒロシマ、ナガサキの三十万は／日本人だけでなく、／強制連行された朝鮮人や／中国人の捕虜、東南アジアの留学生も／異国の戦争に捲きこまれ／焼けただれて死んだことを／知って下さい。」

「一人の死を無視する数のヒロシマを／にくむという詩人Yよ／あなたは なぜ問わないのです／陸や海、空や宇宙にまで／核を配備して 世界中の赤ん坊や／としよりにいたるまで／生きとし生けるものを／みなごろしにする大国の／人間の顔をした死の神々を／もう時間はない／ゼロアワーまで三分しかない」

(初出『詩通信』1983年7月号、詩通信社(堺市)〔後に『反核詩画集・青い光が閃くその前に』(栗原貞子・詩／吉野誠・画、詩集刊行の会、1986年4月10日刊)に収録／『栗原貞子全詩篇』、土曜美術社出版販売、2005年、419ページおよび421ページ)——なお第9連末尾の「ゼロアワー」は、軍事行動の開始時刻を意味する語句を転用したもので、核戦争による人類絶滅の決定的瞬間までの残り時間を象徴的に表示する「世界終末時計」を指しています。米ソの軍拡競争が激化した1984年時点では「残り3分」に迫っていました。)

初出誌では「詩人Y」とあえて名指しを避けていたのですが、単行本(1986年)に載せるにあたり、栗原さんは次のような自註を付けています——「『知って下さい、ヒロシマを』はシベリアで苛酷な収容所体験をし、そのことに怨念をもってこだわり続けた詩人の石原吉郎氏(故)の「一人の死を無視するが故に数を告発するヒロシマをにくむ」というエッセイを読んで書いた。広島的大量虐殺は一人一人の死を死ねないで、数としてしか死ねなかった悲惨であることを知ってもらうために書いた。もちろんシベリアの収容所体験もアウシュヴィッツにひとしい非人間的な体験であることに変わりはない。」(前掲『栗原貞子全詩篇』422ページ)

石原吉郎が亡くなって6年後、「知って下さい」と「詩人Y」に呼びかけた栗原さん——苗字(石原)の頭文字なら「詩人Iよ」となるはずなのに、なぜか名前(吉郎)の頭文字のほうが選ばれていました。ひょっとすると、この「詩人Y」には、吉本隆明への当てこすりも込められていたのかも知れません。

栗原さんたちも発起人に加わった「文学者の反核声明」(1981年12月)に対する吉本の執拗な攻撃(『反核』異論、深夜叢書社、1982年ほか)を思い合わせると、そう勘ぐりたくなる私なのですが、今となっては確かめようがありません。

「広島告発」に対する石原の論難を「数を告発するヒロシマをにくむ」と評したのは、明らかに栗原さんの勇み足だと判定せざるを得ません。けれども「広島的大量虐殺は一人一人の死を死ねないで、数としてしか死ねなかった悲惨であること」を知ってもらいたいという願いには切実なものがあります。こう考え進めた私が、2011年の「白熱教室JAPAN」に登壇する段階において詩人のお二人から学び取ろうとしたポイントは、二つに絞られました。第一に(石原に関しては)「ジェノサイド」だけでなく「不幸」や「苦痛」といった集計概念さらには種々の「計量的発想」を「脱集計化」(disaggregation)することであり、第二に(栗原に関しては)当事者性もしくは「現場性」(李静和『求めの政治学——言葉・這い舞う島』、岩波書店、2004年、18ページ以下)の「脱中心化」(decentration)を図ること、これです。

「脱中心化」という指向 ——《正義の編み直し》のために

「脱中心化」から始めましょう。正義とケアの「編み直し」——『脱＝社会科学』(原著1991年、邦訳：藤原書店、1993年)においてイマニュエル・ウォーラーステインが全面展開している《unthinking》に、鶴見俊輔さんが当てた達意平明な訳語がこの「編み直し」です——という私の年来の主題のうち、とりわけ正義のほうに関連するのが、「脱中心化」という方法的態度にほかなりません。言うまでもなく、decentrationとはピアジェの発達心理学の中心概念であり、「自己中心性」(自分中心のものの見方)を脱け出して、ものの見方・観点が複数あることを自覚していく認知発達プロセスを指しています。ここではピアジェの原典や研究文献ではなく、吉野源三郎の名著『君たちはどう生きるか』(初版は1937年刊／岩波文庫、1982年)の一節を引いて「脱中心化」の要点を押さえておきましょう(ただしここで吉野さんが意識されていたのはカントにおける「コペルニクス的転回」であって、ピアジェではありません)。

「子供のうちは、どんな人でも、地動説ではなく、天動説のような考え方をしている。子供の知識を観察して見たまえ。みんな、自分を中心としてまとめあげられている。電車通りは、うちの門から左の方へいったところ、ポストは右の方へ行ったところであって、八百屋さんは、その角を曲がったところにある。[……]それが、大人になると、多かれ少なかれ、地動説のような考え方になって来る。広い世間というものを先にして、その上で、いろいろなものごとや、人を理解してゆくんだ。」(岩波文庫、25～26ページ)

翻って教育や福祉の実践においては、ニーズをアピールする当事者やニーズが発生する現場が徐々にではあれ重視されるようになりました。「その現場に、はだして立った者にしか告発は許されない」という石原吉郎の明言を考え合わせても、当事者の苦しみやニーズは本人にしかわからない、現場に身をさらさなかった者は発言する資格がない……とする決めつけが、一定の説得力を持つことも理解できなくはありません。でもだからといって、当事者や現場関係者以外はものを言うなということになれば、およそ対話や議論なるものが成り立たなくなるでしょう。また、当事者や現場を固定してしまうと、当事者間の差異や現場内部の対立が見えなくなる危険性すら生じてきます。当事者性や現場性の「脱中心化」が要請されてくるのは、そこにおいてこそではないでしょうか。当事者や現場を尊重しつつも、その人たちを中心部に張り付けてこと足れりとするのではなく、当事者や現場をたえず中心からずらし分散・複数化していく作業を通じて、観察者の視点をも取り込んだ公平さへと徐々に近づいていけるものと考えたいのです。

「脱中心化」の具体的な見本をひとつ挙げさせてください。この史代さん(広島市出身の漫画家、代表作に『夕風の街 桜の国』双葉社、2004年および『この世界の片隅に』双葉社、2008～2009年があります)の絵手紙形式の書き下ろし「外側の人へ」が、東日本大震災から一年後に編まれた文集に収められています。彼女のスケッチもお見せしたいところですが、本文だけで我慢いたしましょう。

「今は、この国のいたるところに「がんばろう日本」「がんばろう東北」と書いてある。／「がんばろう」

に対して「がんばっています」は圧倒的に少ない。あんなにがんばっているのに。自分ががんばっているかどうかは、案外その時には判らないものだ。しかも、もっとがんばらねばならない事だけは判っているからだ。／代わりに、「我々はまだまし」という言葉を多く聞いた。津波の来なかったところは来たところと比べて。原発事故に巻き込まれた町と比べて。死んでしまった誰かと比べて。[……]／こうしてどこまでも、仕切りを作って、まだましな「外側」の人間だと思おうとしてしまうのだろうか。「内側」の人への同情をもって、がんばっている自覚のないまま、がんばろうとしてしまうのだろうか。／でも、「外側」になってみないと判らない事だってある。／「外側」に伝わらなくては意味がない事だっていくつもある、とわたし達は知っている。／心を澄ましておこう。「内側」から囁かれる何かを、「外側」の人間として、ひとかけらずつ受け取ってゆこう。／そしてもっと「外側」の誰かへ、「内側」の人間として伝えようと思う。」

(「外側の人へ」、岩波書店編集部編『3.11を心に刻んで』、岩波書店、2012年、105～107ページ)

くだくだしいコメントは不要でしょう。「内側」から囁かれる何かを「外側」から受け取り、そしてもっと「外側」の誰かへ伝えようとする——“当事者性の「脱中心化」。とは、こうしたたゆまぬ試行のことなのです。目撃者ではない自分は「広島について、どのような発言をする意志ももたない」と断念した石原に対して、「知って下さい、ヒロシマを」と繰り返し訴えた栗原さんの声も“当事者性の「脱中心化」、の導きとなるのではないのでしょうか。

「脱集計化」という企図 ——《ケアの編み直し》のために

「脱集計化」に移ります。こちらはケアの“編み直し、の中軸とすべき方法的態度であると申せましょう。以下で確認するように、アマルティア・センがその模範を演じてくれています。計量的発想からの脱却や「一人や二人」のその一人こそが広島の原因である」と訴えた石原吉郎も、「脱集計化」の大切さを直観的に掴んでいたに違いありません。

さて「脱集計化」(disaggregation)とは、貧困・飢餓に立ち向かうアマルティア・センの身構えを、

開発経済学者の峯陽一さんが見事に言い当てたものでして、多種多様な集計量や集計概念を分解・解体することにより、個々の構成要素が人びとの暮らしよさ (well-being) にどう影響しているかを突き詰めていく流儀を指します。各種の集計データを注意深く分析する手間を惜しまなかったセンだからこそ、現代の飢饉が人口及び食糧供給量という二つの集計量の相関 (アンバランス) によっては説明できないことや「家計」(household) という経済主体として一括された老若男女の中に「非決定者」(消費や貯蓄といった一家の暮らしを左右する意思決定に参与できない当事者) が伏在している事態をも、鋭く見抜くことができたのです。

たとえばセンの「原体験」とも言うべきベンガル大飢饉 (1943年) は、旱魃や洪水などに起因する凶作＝食糧不足が招いたものではありません。日本軍のインド侵攻を恐れた一部住民の食糧買い占めおよび軍需産業の急成長 (それに伴う軍需産業従事者の賃金の急上昇) がもたらした、食糧価格の騰貴が引き金となっています。1943年時点でベンガル地方の食糧供給量はピークにあって、市場に主穀はじゅうぶん出回っていたにもかかわらず、小作農や非軍需産業の労働者・職人など「被害を受けやすい諸集団」(vulnerable groups) の食糧購買力の相対的な低下と、インド総督府の飢饉対策の立ち遅れとがあいまって、短期間におびただしい人びとが餓死してしまいました。つまり、この飢饉は「天災」というよりも、むしろ限りなく「人災」に近い惨事だったのです。

峯陽一さんの的確な注解をお借りします——「脱集計化とは、概念というよりも、問題にアプローチする際の構え方である。センによれば、これまでの開発経済学は、富と貧困の指標として、国民生産や総所得、総供給といった集計化されたデータに関心を集中しすぎる傾向があった。[……]究極的に重要なのは、具体的な顔をもつ個人の福祉の増進である。しかし、そこまで一挙に脱集計化を進めると経済分析としては意味をなさない。そこでセンは、個人と国家のあいだのさまざまな中間項に注目する。すなわち、一国の経済が困難に直面する場合、それが地域、所得階層、職業集団、性別、年齢の違いに応じて人々に不均等に打撃を与えていくプロセスを、できる限り丁寧に検証しようとするのである。」(前掲「開発研究にセンがもたらしたもの」)

「脱集計化」はセンや経済学者の専売特許ではありません。教育や教育学の分野において、もっと活用されてしかるべきアプローチです。何よりもまず、児童・生徒一人ひとりに向き合わないままクラスや学年、学校などの集団単位で括った評価で済ませてしまう教師のスタンスを矯正するのに、この手法が有効な手立てになるのではないのでしょうか。そこで思い起こすのが、鶴見俊輔さんが『教育再定義への試み』(岩波現代文庫、2010年——原本は同じ岩波書店より1999年10月刊行) で提起した「まるごと (whole) と全体 (total)」との区別です。

「明治のはじめには、手ばやくつよい国家をつくるために、集団として型にはめこむ教育が、小学校だけでなく、中学校、高等学校、大学に必要となった。この場合、教師は集団として養成され、教師用の教科書 (マニュアル) をもって、おなじ教科書 (これは生徒用) を使って集団としての生徒に対する。授業は規格化され、採点もおなじ規準によってなされる。生徒は、おちこぼれるものを別として均質化される。[……]ここにひとりの生徒がいると、その生徒の位置は、達成度によって同年齢のものの中のこのくらいのもので確定することができる。これは全体 (total) の中での位置づけである。／まるごとというのは、そのひとの手も足も、いやその指のひとつひとつ、においをかぎとる力とか、天気をよみとる力とか、皮膚であつき、さむき、しめりぐあいをとらえる力とか、体の各部分と五感に、そしてそのひと特有の記憶のつきかさなりがともにはたらいで、状況ととりくむことを指す。その人のこれまでにうけた傷の記憶が、目のものごとのうけとりかたを深めたり、ゆがめたり、さけたりすることを含む。」(岩波現代文庫、30～31ページ)

さらに「全体」から「まるごと」へと観点を転換する「脱集計化」を自覚的に用いることによって、学習指導要領や教科書に盛り込まれている各種の概念のこわばりをほぐして児童・生徒の臍に落ちるものへとかみ砕いていけるかも知れません。及ばずながら私めも、高等学校公民科「現代社会」の教科書を分担執筆した際に、「人権」をこうパラフレーズしてみました——「それを失うと自分が自分でなくなり、それを奪うと相手が相手でなくなるような大事なことから」(詳しくは拙論「公民科教育という試練

の場——〈教育における臨床の知〉に寄せて」、『教育学研究』第69巻第4号、日本教育学会、2002年を参照願います。

ここで本論を結ぶと「何だ、まるで『手前味噌、みたいなオチじゃないか……』との印象を与えかねません。そこで私が「脱集計化」のお手本にしてきた三つのテキストを新しいものから順に追加・紹介しておくことといたします。

最初は、東日本大震災の被災者支援に関する精神科医の宮地尚子さんの提言。

「今、第一に必要なことは、「心のケア」＝「メンタル・ヘルス」を被災者に供給することよりも、メンタリー・ヘルシーな対応や施策を、社会全体がこころがけることだと私は思う。そして何がメンタリー・ヘルシーかという、個々の被災者が深く傷ついているということと、「復興」の道のりが新たなストレスをもたらすということを認識しながら、それでも被災者が希望やつながりを感じられるような復興のビジョンを社会が一緒に考え、実行していくことだと思う。」

（「心のケア」とは何か、『オルタ』2011年9・10月号＝通巻430号、アジア太平洋資料センター）

「心のケア」や「メンタル・ヘルス」なるものを専門家しか提供できない特殊なスキル（名詞句）として一括するのでなく、「メンタリー・ヘルシーな」（対応）という形容詞句へとずらしていく。そうした手順を踏むことで、社会全体（つまり私たち一人ひとり）が取り組むべき課題や目標をしっかりと把握できるというわけなのです。

次は「養護学校義務化」阻止闘争（1974年～1979年）の関連文献を調べていて出会った、篠原睦治さんの著作の一文。

「たみちゃんという名の「障害児」、きみ君という名の「障害児」、そして、みよちゃんという名の「障害児」は、「手細工のにがてな」たみちゃん、「こまかいものを見るのに不自由な」きみ君、そして、「一斉授業になかなか慣れない」みよちゃんとして受けとめなおされなくてはならない。」

（『「障害児」観再考——「教育＝共育」試論』、明治図書、1976年、153～154ページ）

篠原さんも同じく「障害児」と一括りにするポーズを排して、一人ひとりの名前を挙げながら、それ

ぞれの育ちのありように迫ろうとなさっています。そもそもこの私は、篠原さんたちが1972年5月に立ち上げた「子供問題研究会」およびその後の運動が標榜した「共育共生」というスローガンこそが「共生」の現代的語法の重要な背景をなした、との見通しをつけているのです。

最後にシモーヌ・ヴェイユを引かせていただきます。死後まとめられた『神を待ちのぞむ』（原著1950年刊）所収のエッセイ「神への愛のために学校の勉強を活用することについての省察」（執筆は1942年4月）の末尾からです。

「まったき隣人愛とは、「あなたを苦しめるものはないか」（*Quel est ton tourment?*）と問うことに尽きる。不幸な人がなんらかの集合体を構成する一単位としてではなく、「不幸な者」というレッテルを貼られた社会的カテゴリーの一員としてでもなく、わたしたち自身とまったく同じ人間であるにもかかわらず、ある日、不幸に見舞われて、模倣をゆるさぬ不幸の烙印を押されたひとりの具体的な人間として存在することを知る。これが隣人愛である。」

（『神を待ちのぞむ』は勁草書房および春秋社から二種類の翻訳が出ていますが、ここでは富原眞弓編訳『ヴェイユの言葉』みすず書房、2003年、248ページの訳文に従っています）

不幸な人を「集合体」や「社会的カテゴリー」に詰め込んだまま、パッケージ化された対策を一律に処方してお仕舞いとするのではなく、「どんな痛み・苦しみに見舞われてらっしゃるのですか」という二人称単数（「あなた」）に宛てた質問を発しながら「ひとりの具体的な人間」に向き合うこと——ヴェイユの教えを「不幸の「脱集計化」、の勧めへと読みつなげるのは決して無理筋ではない、と確信しています。

おわりに——余生の心がけ

結びにあたり、これから私が「どう生きるか」を三つのモットーでもってお示ししようと思います。お手もとの「文化学原論・生命環境倫理学・西洋教育史——ゼミ35年間の歩み」（『研究室紀要』本号に再録）をご覧ください。この資料は2015年2月28日に開かれた「三校合同ゼミ打ち上げ」の式場で配ったものです。初任校・跡見女子学園大学、次の東北大学、そして東京大学——足かけ35年の教員生活の

締めくくりにと、各校のゼミで講読した文献の年次別リストを作成してみました。貧相な「研究業績一覧」を残すよりも、「いつ、どこで、誰と、何を、読み合わせてきたかを振り返るほうがどんなに意味があるだろう」と思い定めて、手間暇かけてリサーチした産物です。

モットーのひとつ目が「立ち入らず、立ち去らず」。市野川容孝さんのイニシアチブで雑誌『思想』特集号のための勉強会が始まり、後に同僚となる佐藤学さんや金森修さんたちとの論議と交流を深めました。同誌2000年2月号に「自己決定権と内発的義務——〈生命圏の政治学〉の手前で」を寄稿した私でしたが、母の介護体験から思いついたこの標語を論文のラストに書き留めておいたのです。当事者の「自己決定権」と他者へのケアに向かう「内発的義務」とを抽象名詞どうし対置して優劣を競わせるのではなく、二つの動詞句へと書き換えて併記したら、両者を共存させる理路が開けてくるのではないかと……との希望的観測に基づいてです。このお題目を「学生の学ぶ自由をとことん尊重しながら、当人たちの成長を付かず離れずに見守り続けよ」という大学教員向けの命令文に読み替えていきたい。

二つ目の「統べず・括らず、ほぐし・ばらす」は、ずばり「脱集計化」の実践指針です。「この学年は(今年のゼミ生は)～」と一括評価しがちな教員への自戒でもあります。最後のご奉公先となるであろう国際基督教大学において、学生一人ひとりに向きあいケアするためにも《ほぐし・ばらす》絶えざる努力が欠かせないでしょう。

三つ目の「規則を超える者には、いのちを賭けた愛を!!」については、説明を補う必要があります。中学生の私をカトリックの信仰へと導いてくださった恩師の林尚志先生(当時はイエズス会神学生。1969年に司祭となられて、現在は下関労働教育センター所長。主著『石が叫ぶ福音——喪失と汚染の大地から』、岩波書店、2011年)より、この意味深長な教訓を頂戴しました(2014年11月23日、広島島の拙宅にて)。師の真意はイエスの言行に即した戒めにあるのでしょけれど、私はこれを次のように受けとり直そうと思います。つまり、「学生たちから(既成の規則には沿わないかたちであれ)筋の通った追及を受けた場合、ルール違反だと頭ごなしに却下したりせず、彼女ら／彼らの側にあえて立とうと努め、いざとなったら自らの出处進退を明らかにする覚悟を保持

せよ」と、命じることばとしてです。

国立大学法人化初年度の2004年4月、杜の都の大学から東大へと異動してきました。ショートリリーフの控え投手のつもりで移籍したのに、あまりの居心地のよさに気づいたら11年間もベンチを暖め続けた計算になります。ほかの誰よりもまずここで出会った学生・院生お一人おひとりに、そしてスタッフや職員の皆さまがたに心からの謝意を表したいと思います。ありがとうございます。

【付記】2015年7月1日、東京大学教育学部第一会議室で行われた大学院基礎教育学コース「総合演習」でのスピーチに、文献データや引用文を補うなどの再構成を施した。テープ起し原稿には、司会者の前説、新旧の専任スタッフのコメント、さらに私が指名したゲストお二人(木村直恵さんと金井淑子さん)の質問と要望まできちんと文章化されていたのだが、割り当て紙数の関係もあって割愛を余儀なくされた。関係者のご寛恕を請う次第である。

【追記(2016年5月27日)】脱稿後、畏友・金森修氏の計報が届いた。最初にお会いしたのは氏が筑波大学にお勤めのころ、学士会館本郷分館で開かれた某哲学研究サークルの会合においてだったと記憶している。そして親交を深めたのは、本文にも記したとおり、市野川容孝氏が組織した研究会を通じてだった。

東北大学文学部に奉職していた私がこちらへ転じる踏ん切りをつけられたのには、東京水産大学(当時)から東京大学大学院教育学研究科(学校教育学コース)へと氏が一足先に異動されていたのが心強い支えになった。同じ職場に通うようになって多産なお仕事ぶりを間近に見られたし、コース再編のおかげで正真正銘の「同僚」となって以降は、論文指導や入試業務、会議・合宿・酒席などさまざまな場を共にしてきた。学生・院生に対して発せられた厳しくも温かい(ことばの真の意味で“caring”な!)氏の口吻が鮮やかによみがえってくる。

2011年9月19日、広島市での二日間の国際シンポジウムをご一緒したあと原爆資料館を案内し、被爆家屋を建て直した私の実家に立ち寄ってもらった。初めてだったという資料館見学を機に氏は原爆文学

へと視野を広げられ、作家・大田洋子の世界に深く立ち入った評論をものされている（『限界体験の傷口——〈原爆文学〉と原発事故』、内田隆三編『現代社会と人間への問い——いかにして現在を流動化するのか？』、せりか書房、2015年、所収）。ちなみに、私の三つ年下の氏は1970年4月に北海道立札幌南高校へ入学されており、上級生たちが起した「暴動」（いわゆる「札幌闘争」——小林哲夫『高校紛争1969-1970——「闘争」の歴史と証言』中公新書、2012

年の201ページ以下にその経緯が記載されている）に立ち会っていたのである。

氏にまつわるあれこれの思い出は尽きず、ご本人の経験や卓見をまるごと聴き出すにいたらないまま、お別れしてしまった憾みが残る。しかし今はただ静かに、ご冥福をお祈りするとしよう。

金森修さん、友だちに加えてくれてありがとう、さようなら。